

## 田中宏先生略歴

|                 |                     |
|-----------------|---------------------|
| 1937（昭和12）年2月9日 | 東京都で出生              |
| 1960（昭和35）年3月   | 東京外国語大学中国学科卒業       |
| 1963（昭和38）年3月   | 一橋大学大学院経済学研究科（修士）修了 |
| 1962（昭和37）年2月   | 財団法人アジア学生文化協会勤務     |
| 1972（昭和47）年5月   | 愛知県立大学外国語学部講師       |
| 1973（昭和48）年4月   | 同助教授                |
| 1982（昭和57）年4月   | 同教授                 |
| 1993（平成5）年4月    | 一橋大学社会学部教授          |
| 2000（平成12）年4月   | 一橋大学名誉教授・龍谷大学経済学部教授 |

## 田中宏先生業績一覧

### I 著書の部

#### （著書など）

- 『アジア留学生と日本』（永井道雄ほかと共著）日本放送出版会（NHKブックス）、1973年
- 『アジア人との出会い——国際交流とは何か』田畑書店、1976年
- 『司法修習生・弁護士と国籍——金敬得問題資料』（原後山治と共編）日本評論社、1977年
- 『日本のなかのアジア——留学生・在日朝鮮人・難民』大和書房、1980年
- 『日本軍政とアジアの民族運動』（編）アジア経済研究所、1983年
- 『日本のなかの韓国、朝鮮人、中国人——神奈川県内在住外国人実態調査より』（金原左門ほかと共著）明石書店、1987年
- 『資料 中国人強制連行』（内海愛子ほかと解説）明石書店、1987年
- 『指紋制度撤廃への論理』（今村嗣夫ほかと共著）新幹社、1987年
- 『現代のエスプリ』249号（ジャバゆきさんの現在）（三好亜矢子と共編）、1988年
- 『虚妄の国際国家・日本』風媒社、1990年
- 『資料、中国人強制連行の記録』（新美隆ほかと共編）、明石書店、1990年
- 『在日外国人——法の壁、心の溝』岩波書店（新書）、1991年／同新版、1995年中国の延辺人民出版社より朝鮮語版
- 『ハンドブック戦後補償』（内海愛子ほかと監修）梨の木舎、1992年
- 『検証 中国人強制連行』日中友好協会、1994年
- 『戦争責任・戦後責任——日本とドイツはどう違うか』（栗原憲太郎ほかと共著）朝日新聞社（選書）、1994年ソウルのSAMIN出版より韓国語版
- 『中国人強制連行資料——外務省報告書全5分冊ほか』（松沢哲成と共編）現代書館、1995年

『遺族と戦後』(共著) 岩波書店(新書)、1995年

『Q & A 外国人の地方参政権』五月書房、1996年

『隣国からの告発——強制連行の企業責任2』(山田昭次と共編) 創史社、1996年

『来日外国人人権白書』(江橋崇と共編) 明石書店、1997年

### (訳書など)

『シンガポール中華総商会における帮派論争』 アジア経済研究所、1970年

『日本を見つめるアジア人の眼』田畑書店、1972年

黄春明『さよなら・再見』(共訳) めこん、1979年

陳映真「村の教師」(『彩鳳の夢——台湾現代小説選1』研文出版、1984年所収)

卓南生『現代の鎖国——アジアから日本の実像が見える』(共訳) めこん、1985年

許雲樵・蔡史君編『日本軍占領下のシンガポール』(共訳) 青木書店、1986年

卓南生『国際化日本の壁』(共訳) 東洋経済新報社、1990年

## II 論文の部

「日本の植民地支配下における国籍関係の経緯」『愛知県立大学外国語学部紀要(地域研究・関連諸科学編)』9号、61～96頁、1974年12月

「日本の台湾・朝鮮支配と国籍問題」『法律時報』47巻4号、85～97頁、日本評論社、1975年4月

「不条理な在日朝鮮人政策の出立—日本国籍喪失の論理にひそむもの」『季刊三千里』8号、78～86頁、1976年11月

「インド国民軍の背景としてのマラヤにおける日本軍政」『南アジアの民族運動と日本』81～97頁、アジア経済研究所、1980年3月

「マラヤ軍政と戦後日本—中島氏の宣言と篠崎氏の回想録をめぐって」『愛知県立大学外国語学部紀要(地域研究・関連諸科学編)』14号、73～97頁、1981年3月

「台湾総督府の対人掌握策と高山族」『台湾霧社蜂起事件、研究と資料』114～130頁、社会思想社、1981年6月

「Ⅲ、2. 植民地統治を支えた国籍」『国籍を考える』136～176頁、時事通信社、1984年2月

「2. 民族問題と差別」『差別と人権』201～248頁、雄山閣、1985年4月

「外国人指紋制度の導入経緯」『季刊三千里』42号、42～49頁、1985年5月

「戦後日本とポスト植民地問題」『思想』734号、38～52頁、岩波書店、1985年8月

「日本の旧植民地出身者と戦後補償」『法律時報』61巻9号、31～36頁、日本評論社、1989年8月

「戦後補償における国際事例に学ぶ」『在日韓国・朝鮮人の戦後補償』明石書店、175～188頁、1991年10月

「花岡事件と戦争遺留問題(中文)」『抗日戦争研究』92年4期、1～9頁、1992年11月

「7. 日本の戦後責任とアジア—戦後補償と歴史認識」『近代日本と植民地8 アジアの冷

- 戦と脱植民地化』岩波書店、183～216頁、1993年6月ドイツ語版「Japans Nachkriegs-verantwortung und Asien-Nachkriegsentschädigungen und Geschichtsauffassung」『Zeitschrift für Geschichtswissenschaft』47. Jahrgang Heft 5, 389～412頁, Friedrich Veitl, Metropol-verlag, 1999年
- 「日中復交20年と戦後補償問題」『神奈川大学・人文研究』118号、135～190頁、1993年10月
- 「日本は戦争にどう対してきたか」『世界』591号、122～132頁、岩波書店、1994年2月
- 「これでは戦後50年の区切りはつかない」『世界』606号、168～175頁、岩波書店、1995年3月
- 「Why is Asia Demanding Postwar Compensation Now?」『Hitotsubashi Journal of Social Studies』Vol.28 No.1、1～14頁、Hitotsubashi Academy、1996年7月
- 「内に厚い戦争犠牲者援護と歪む歴史認識（中文）」『日軍侵華暴行（国際）学術検討会文集』288～295頁、新華出版社、1996年9月
- 「地方公務員の国籍要件撤廃の現段階」『ヒューマンライツ』96年12月号、44～49頁、部落解放研究所、1996年12月
- 「自由主義史観が出てきた背景—それは現代への転向か?」『月刊オルタ』97年3月号、5～8頁、1997年3月
- 「日本の歴史認識をめぐる二つのながれ（中文）」『東北淪陥史研究』1997年第4期、70～75頁、1997年12月
- 「在日韓国人の参政権問題について（中文）」『東北亜政治与文化論叢』第三輯、98～102頁、延边大学出版社、1997年12月
- 「南京大虐殺から日中友好姉妹都市提携まで（中文）」『侵華日軍南京大屠殺史国際学術研討会論文集』591～598頁、安徽大学出版社、1998年1月
- 「国立大はいつまで外国人学校に門を閉ざすのか」『世界』98年6月号、46～52頁、岩波書店、1998年6月
- 「グローバル化と日本社会の多民族・多文化化の行方」『教育』98年10月号、6～15頁、国土社、1998年10月
- 「外国人学校生の大学受験 門戸は開いたか」『世界』99年9月号、26～29頁、岩波書店、1999年9月
- 「日本社会の多民族化と法システム」『法社会学』52号、113～119頁、有斐閣、2000年3月
- 「日本における民際学研究の一課題について」『経済学論集』39巻4号、137～157頁、龍谷大学、2000年3月
- 「日本の戦後補償における内側と外側」『人権年報』26号、28～33頁、桃山学院大、2000年3月
- 「在日外国人の権利 その推移と課題」『地域社会の国際化とアジアの人権』26～43頁、解放出版社、2000年5月